

題目

「5 因子性格特性と I U E の関連」

著者

谷伊織（東海学園大学人文学部）

掲載誌

日本パーソナリティ心理学会第 21 回大会抄録集、27

問題

性格を構成する基本的な複数の心理次元を想定し、それらがどのような構造的関係を持つのかについて、これまで多様な見解が示されているが、現在は性格特性の 5 因子モデルが多く用いられている。また、現在普及している性格検査の一つに質問紙法エゴグラムがある。この検査は自我状態の機能に対応した 5 つの下位尺度因子が、因子分析に基づいて抽出されており、一種の特性因子論的性格検査に含めることができるが、一方で自我状態の概念は交流分析理論を構成する基礎概念であり、臨床実践を背景とした人格理論体系によって裏付けられた状態を表すものでもある。これまでもエゴグラム検査と 5 因子性格特性の関係については中沼（1996）がビッグファイブ尺度（和田、1996）と T E G（第 1 版）、森田（1998）が F F P Q（辻、1998）と T E G（第 2 版）の関係を検討しており、エゴグラムと 5 因子性格特性の関係には興味関心が払われてきた。ここでは、エゴグラム尺度のうちの一つである I U E を用いて、5 因子性格特性との関連を検計する。I U E は質問紙エゴグラムの一種であるが、従来の自我状態概念に心理エネルギー志向性の概念を導入して、自己対処と他者対処自我機能を測定できるように作られている。本研究においては、5 因子性格特性によって表現される人格特徴と交流分析理論に基づく I U E との関連を検討する。

方法

調査対象者：愛知県の大学生および専門学校生 131 名を対象として質問紙調査を行った。

測定尺度：①ビッグファイブ尺度（和田、1996）：「外向性」「神経症傾向」「経験への開放性」「勤勉性」「協調性」の 5 下位尺度、各 12 項目、計 60 項目、7 件法を使用した。② I U E（西川、2007）：「I C P」、「I N P」、「I A」、「I F C」、「I A C」、「U C P」、「U N P」、「U A」、「U F C」、「U A C」の 10 下位尺度、各 8 項目、計 80 項目、3 件法を使用した。

結果

それぞれの下位因子に含まれる項目得点を合計して尺度得点を算出し、相関係数を算出した（Table1）。

ビッグファイブと I U E における各下位尺度との関係について、「外向性」は「I N P」

「UNP」「IFC」との間に相関、「神経症傾向」は「INP」「IAC」「UCP」「UAC」との間に相関、経験への開放性は「ICP」「INP」「IA」「UNP」「UA」との間に相関、「協調性」は「INP」「UCP」との間に相関、「勤勉性」は「ICP」「IA」「UNP」「UA」との間に相関関係が見られた。

Table1 Big Five と IUE の間の相関関係

	外向性	神経症傾向	経験への開放性	協調性	勤勉性
ICP	.22	.15	.35	.04	.37
INP	.41	-.48	.38	.30	.24
IA	.10	.29	.54	.23	.40
IFC	.03	.14	.29	-.03	-.02
IAC	.13	.60	.03	-.17	-.01
UCP	.01	.08	.01	-.33	-.08
UNP	.37	.02	.30	.26	.33
UA	.12	.08	.54	.12	.47
UFC	.52	-.27	.29	-.07	-.18
UAC	-.11	.35	-.10	.26	-.19

考察

UFC と外向性の間に正の相関、UCP と協調性の間には負の相関、UA と勤勉性の間には正の相関、UAC と神経症傾向の間には正の相関が見られたが、得られた結果はいずれも IUE と TEG の関連やビッグファイブと TEG の関連を調べた先行研究と整合的であり、解釈可能であり、ビッグファイブと IUE の間の関連性が示された。

引用文献

西川和夫 (2007.) IUEハンドブック 田研出版.

和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究、67、61-67

(TANI Iori)